

02-31

包括的心臓リハビリテーションチームによる心臓病教室の開設と効果

福岡赤十字病院 北入院棟三階

○上久保 恵理子

【目的】 国内の心不全患者は増加の一途を辿り、心不全を再発・重症化させないという心不全予防の観点が重要である。A病棟では心不全増悪による再入院率が全国平均と同等であり、心不全のみならず心筋梗塞患者の再入院率低下を目的に、患者の自己管理に焦点を当てた多職種アプローチによる心臓病教室を開設した。心臓病教室受講患者の自己管理が強化されたことによる再入院率減少の効果を考察する。

【方法】 包括的心臓リハビリテーションの一環として医師・看護師・薬剤師・栄養士・検査技師・理学療法士が、心不全・心筋梗塞を発症し入院中の患者を対象とした心臓病教室の講義を担当し、入院中に自己管理に関する知識獲得の機会を提供した。また、心不全手帳を活用し入院中から自己管理を開始できるようにした。講義内容等についてアンケートを行い心臓病教室の効果を考察し、心臓病教室開設前後の再入院率を測定した。

【結果】 心臓病教室を開設後、A病棟の心不全・心筋梗塞患者の再入院率は低下していた。アンケートの結果は、多職種が講義を行うことについて高評価であった。自己管理の熟考期から準備期・行動期への移行を促進させる機会になった。外来心臓リハビリテーションを継続した患者は退院後の自己管理のサポートを受ける機会になり、心不全・心筋梗塞の再入院はなかった。

【考察】 包括的心臓リハビリテーションの一環として多職種による講義を行う心臓病教室は自己管理を促進させ心不全患者の再入院率を低下させる要因となる。アンケートの結果を基に心臓病教室をさらに充実させる必要がある。退院後も外来での包括的心臓リハビリテーションを継続することで心不全・心筋梗塞の再入院率を減少させるため、外来心臓リハビリテーションの拡大が望まれる。

02-32

総合病院精神科病棟における集団精神療法へのPSWの関わり ～現状と課題～

横浜市立みなと赤十字病院 医療社会事業課

○瀧川 晴菜、持松 泰彦、乾 尚美、渡邊 貴子、金井 緑、木下 聖子、大湯 宝子

【目的】 当院精神科病棟は急性期病院として神奈川県精神科救急システムへ参画し、かつ総合病院という特徴を生かし身体疾患を合併した精神疾患患者を多く受け入れている。その為、精神的な症状が重く、身体的にも急性期治療を要する患者が病棟の多くを占めている。その様な現状の中で行う集団精神療法における、入院患者とPSWの関わりについて報告し、PSWのどのような関わり方が、患者にプラスに影響するのかを考察する。

【現状】 当院精神科病棟では、週一回、入院患者に対し集団精神療法を行っており、そこに毎週PSWがコリダーとして関わっている。茶話会と物づくりが主な内容である。活動の参加は自由なため、参加患者の年齢層、性別、症状は様々であり、参加人数も活動によって大きく異なる。平均入院期間が一カ月程であることから、参加者の背景は活動ごとに大きく変わる。そのため、グループの継続性がなく、一人の患者の活動ごとの変化を捉えにくい。しかし、患者の前回参加の情報が無いため、患者に対する先入観を排除し、その時の本人を見つめられるという利点もある。患者にとっても、様々な患者と関わることでより社会生活に近い環境を提供することができている。

【課題・今後の展望】 参加患者の事前情報収集をさらに深く、本人の今後の社会生活環境を見据えた関わりが必要と考える。また、活動の中で発見できたことを患者の退院後生活にどう生かすか、PSWだけではなく参加した多職種で検討していくことが必要である。今後は学習グループとしてPSWが中心となり社会資源情報提供を継続していくことで、患者が今までよりも退院後の生活を考えるきっかけを増やし、地域社会生活のイメージをしやすくしていきたい。

02-33

臨床工学技士との協働で取り組む安全管理 ーチーム医療の質向上をめざして

伊勢赤十字病院 看護部

○松崎 美紀、山川 公子、瀬川 佐織、青木 悦子、荒木 尚美、中村 良子

【目的】 人口構造の急激な変化、疾病構造の変化への対応として国は、安心・安全な医療の提供に向けてチーム医療を推進している。A病棟では患者の重症化、病態の複雑化により医療機器の使用が増加し、安全管理が求められる現状がある。他方、チーム医療としてはすでに様々な活動が行われ、経営的・質的に効果を上げている。しかし、効果を示す困難、医師や各部署の看護師からの協力を得る困難さが示された。また、多忙な現場では対応する余裕がなく多職種の介入の機会を逸したり、逆に「丸投げ」状態になるなど、チーム医療の理解不足から効果的な協働に繋がらない状況があった。今回、患者の安全管理を図ることを目的に臨床工学技士とプロジェクトの立ち上げ、検討を行った。また、チーム医療の質向上をめざし、意識化を図る目的でチーム医療の必要性に関する多職種による研修会を開催した。その経緯と結果からより良いチーム医療に必要な管理者の課題を報告する。研修会実施後のアンケート結果、及びプロジェクト活動の経過より分析する。

【方法】 期間は平成25年7月～平成26年3月。倫理的配慮としては個人が特定されないことや参加は自由意志であることを口頭で説明し同意を得た。

【結果】 臨床工学技士による病棟ラウンドを開始。そして、研修会でのグループワークやアンケート結果からお互いに理解し合う機会を求めていることが明らかになった。今回、一層のチーム医療の向上を図るためにはチーム活動を行うための目的を共有する重要性、メンバー設定と関係性の構築の困難さ、そして管理者としてチーム医療の実現に向けた必要性を示し、納得してもらうことの困難さと組織を動かすことの課題が明らかになった。

02-34

NST活動に対する看護師からの評価

旭川赤十字病院 看護部

○金田 有里子、大蔵 弓枝

【はじめに】 安全・安心な医療サービスの提供のためチーム医療が推進されている。当院のNSTは平成16年から患者の栄養改善を目的に組織横断的に活動している。昨年からNST加算を算定し介入数は増加している。看護師は患者に最も近い存在として栄養改善に関わるため、毎週実施されるNSTカンファレンスにはNST専任看護師の他、病棟看護師が参加している。今回は、NST加算算定開始から1年経過した現在のNST活動に対する看護師からの評価を実施した。

【目的】 NST活動に対する看護師からの評価を実施し、課題を抽出した。

【方法】 対象：NST介入患者が多い2病棟の看護師方法：質問紙調査。倫理的配慮：研究目的と得られた結果により病棟に不利益を与えない事を説明し協力を依頼、同意を得た。

【結果】 現在のNST活動に対して、以前より栄養不良患者が少なくなった、多職種での意見交換・情報共有ができ栄養改善に有効である、学びとなる、という肯定的な意見が得られた。その他、短い入院日数の中で必要かという意見や、カンファレンスの運営、情報提供・共有の方法に対する問題提起があった。

【考察】 今回は看護師からの評価のみであるが、NST活動は有効という評価が得られた。多職種からなるチームで専門性を生かし、患者のQOL向上を目的とした医療サービスが提供できていると言える。急性期病院として栄養状態が改善されてこそ在院日数は短縮でき、転院時には栄養管理情報を提供し連携を図っている。しかし、現状のカンファレンスの運営に関して課題が明らかになった。メンバーが集まってカンファレンスを行う形式から、メンバーが病棟に赴く回診形式への変更と回数の検討が求められる。また情報提供・共有が効率的にできる記録用紙の検討も必要である。

一般演題
10月17日(金)
(口演)